

尺度使用マニュアル

<尺度名>

「二次元レジリエンス要因尺度」

<測定概念>

レジリエンスとは、心理的な傷つきから立ち直る回復力のことであり、個人のレジリエンスは、その人が有する様々な要因（レジリエンス要因）によって導かれる。その多様なレジリエンス要因の中には、持って生まれた気質と関連の強い要因と、後天的に身につけていきやすい獲得的な要因があると考えられる。本尺度は、個人のもつレジリエンス要因を「資質的レジリエンス要因」と「獲得的レジリエンス要因」に分けて捉えることのできる尺度である。

<適用範囲>

中学生以上

<尺度構成手続き>

予備調査において、先行研究で見出されてきたレジリエンス要因の項目を収集し、再分類を行ったのち、項目を選出した。資質的・獲得的の分類基準として、パーソナリティの気質と性格を分けて捉える尺度である Temperament Character Inventory 日本語版 (TCI) (木島・斎藤・竹内・吉野・大野・加藤・北村, 1996) を用い、大学生ら 246 名を対象に調査を行った。探索的因子分析により、TCI の気質と関連の強い『資質的レジリエンス要因』として「楽観性」「統御力」「社交性」「行動力」、TCI の性格と関連の強い『獲得的レジリエンス要因』として「問題解決志向」「自己理解」「他者心理の理解」の 7 因子が見出された。その結果をもとに尺度を再構成し、759 名への調査により二次元構造と妥当性が検討された。

<信頼性>

α 係数は尺度全体で .90、各下位尺度も「資質的レジリエンス要因」で .83、「獲得的レジリエンス要因」で .72 であり、十分な内的一貫性があるといえる。

<妥当性>

①既存のレジリエンス尺度である精神的回復力尺度（小塩・中谷・金子・長峰, 2002）と、尺度全体・下位尺度ともに .64～.74 ($p < .001$) の相関を示し、基準関連妥当性が確認された。

②高次因子分析より、上述した 7 因子および二次元構造が確認された。

③TCI との重回帰分析より、「資質的レジリエンス要因」の下位因子は、いずれも TCI の気質の下位尺度によって最も高く説明され、「獲得的レジリエンス要因」の下位因子は、いずれも TCI の性格の下位尺度によって最も高く説明されることが示されたことから、下位尺度の基準関連妥

当性が確認された。

④「資質的レジリエンス要因」は、一卵性双生児では中程度の級内相関係数が示されたのに対して、二卵性双生児では相関が見られなかったことから、遺伝的影響の寄与が示唆された。

<採点方法>

教示文は「あなた自身についてお答えください。以下の項目について、1「まったくあてはまらない」～5「よくあてはまる」の中で、もっとも当てはまると思う数字に○をつけて下さい。」である。

回答方法は、「1. まったくあてはまらない (1点)」「2. あまりあてはまらない (2点)」「3. どちらともいえない (3点)」「4. ややあてはまる (4点)」「5. よくあてはまる (5点)」の5段階評定である。各項目の合計を、尺度全体・下位尺度の得点とする。

<尺度の使用について>

7つの因子は、個人のレジリエンス理解に役立つものの内的一貫性はあまり高くないため、研究において統計的な検討を行う際には因子レベルよりも2つの下位尺度レベル（資質的要因／獲得的要因）で用いるのが望ましい。

また、臨床場面や教育場面で用いる際には、個々人によって、あるいは状況によって有効なレジリエンス要因は異なるため、必ずしも本尺度の総得点が高いことが望ましいわけではないことに留意し、個人の有するレジリエンス要因をプロフィール的に理解するために活用いただければ幸いである。

<出典文献>

平野真理 (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み——二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成 パーソナリティ研究, **19**, 94-106.

平野真理 (2011). 中高生における二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の妥当性——双生児法を用いて パーソナリティ研究, **20**, 50-52.

<連絡先>

平野真理 (東京家政大学)

e-mail : hiranomarih@gmail.com

<無料・有料の別>

無料

<著作権関連情報>

出典を明記いただき、ご自由にお使いください。ご不明な点はお問い合わせください。